

親史多天と釈尊

特別研究員 伴 戸 昇 空

釈尊が親史多天より降誕されたという伝説は、釈尊の入滅後、相当早い時期に成立したものである。しかし、何故に親史多天 (*Shv. Tusita*; *Pa. Tusita*) という天界から御生まれになったのかという点になると、今ひとつ不明確であると言わねばならない。今回の発表は、その理由を *Tusita* という語そのものの中に求めようとしたものである。

Tusita (*Pa. tusita*) の語根は \sqrt{tus} (*Pa. \sqrt{tus}*) であると言われている。この \sqrt{tus} から派生した諸語は「満足・喜悦」の心的状態を表わすと解される事が多いが、それは \sqrt{tus} に *to be satisfied, content, pleased* といった意味があるからである。故に *Tusitadeva* も「知足天・喜足天」等と訳される場合がある。

しかし、 \sqrt{tus} は第一義的には *to become calm, to be silent* を意味するのであって、「満足」と言っても、それは本来歡喜顯躍するが如き状態を言うのではなく、欲求の鎮静した状態を意味するに同じである。Vedic Sanskrit では \sqrt{tus} は *to be satisfied; to satisfy, appease, bear hard on; to become quiet* を意味し、明らかにそこには「鎮静」という趣きが強かったと言える。又、Indo-Germanic の語源に於て溯れば、 \sqrt{tus} は *taus* であると言われる。 *taus* は *still, schweigend, zufrieden* の意味を持つ。従って、 \sqrt{tus} は鎮静もしくは静穩な沈黙の状態をその基調として表わす語根なのである。Vedic には無かった *ta be pleased*,

happy という意味が \sqrt{tus} に付加されるのは Classical Sanskrit になってからの様である。

一方 Pali の \sqrt{tus} に於ては、Vedic の \sqrt{tus} に有った *to become quiet* 等の鎮静を表わす用法は消失し、代りに Classical Sanskrit の如く *to be pleased, happy, joyful* 等の意味が加わって来る。Pali の \sqrt{tus} には後になるほど「喜悦」の意味合いが強まって来る様である。しかし、Pali 聖典中の古い偈には、しばしば *Brahmana* や *Upanisad* にも殆ど見られぬ Vedic の古く語形が見出たされているから、仏教の初期に用いられていた言葉や古く Pali では Classical Sanskrit である \sqrt{tus} の Vedic Sanskrit に近いものである様である。語形の類似と意味の類似とは必ずしも同列に置いて論ずる訳にはいれないが、教理と直接関わりが無い様な語の場合には、仏教の初期に於ては未だ Vedic の意味を保存していたと考えてよいだろうと思う。

Pali の *tusita* は *tuttha* とともに *tussati* (\sqrt{tus}) の過去受動分詞形であると考えられる。確かに、比較的古い文献の中には、天名としてではなく、形容詞的に用いられている *tusita* をしくは接頭辞を冠した *santusita* の例がいくつも見出たされる。 *Uppalissutta* の偈 (M, I, p. 386) ・ *Dhammapada* 362 ・ *Theragāthā*, 5, 63, 981¹ や古く *Sanghutsuttanta* (D, III, p. 218) に見られるやれである。 *Uppalissutta* の偈は Warden の韻文からの研究により紀元前三百年以前の成立と考えられ、それは *Suttantapāṭa* の最古層に接続する時期である。残りの諸偈も、その内容の素朴さから見て、相当早い時期に成立したものと考えてよいであろう。これらのうち、韻文中に見られる *tusita, santusita* は仏陀や阿羅漢達の心的状態を形容するに用いられており、それは明らかに解脱

者の心境を表わしたものであると言える。又、漸遅れて *Saṃgraha-sūtrānta* に見られる散文文中のそれは、第三静慮と結び付けられるあたり、解脱より少しく外れた感があるが、それでも三昧より生ずる高度に非世俗的な、喜悅をも離れた満足感を表わしている点で、韻文中の用法と通ずるものがあると言える。故に、*Pāli* 聖典の古層に見られる *tusita* は、*Vedic* の *√tus* の意味に近く、「欲求の鎮靜」を宗教的理想と見て、解脱者の心境を表わす語として用いられていたと考えてよいであろう。

ニカーヤの古層に於ては、*tusita* は迷いの世界から解脱した阿羅漢達——仏陀もその一人であった——の心境を表現する語であった。それが涅槃の同義語として登録されなかったのは、余程早い時期に天界の名として固有名詞化してしまったからであろうか。*tusita* の過去受動分詞形として形容詞的に用いられていた *tusita* と天名の *Tusita* とは軌を一にして、全く同様に *tuttha* で換言解釈されるのが註釈時代の通例であったから、通説に言う如く天名の *Tusita* はこの *tusati* の過去受動分詞形からの転用であったと考えてよいであろう。一方 *Sanskrit* の *Tusita* も本来は *tusyati* (*√tus*) の過去受動分詞形であったらうと言われている。しかし、実際にそれが *Pāli* の *tusita* の如く形容詞的に用いられていることは——仏典梵文中に見出だせる僅かの例を除いては——全く無いと言つてよい。

もつと *Tusita* という天名が現われるのは仏教文献だけでは無い。しかし、外教では総じて *Tusita* に附随的な役割しか与

えていないのに比して、外教では開祖の誕生と結び付けて扱われているのであるから、それは仏教内で成立した天名であると言われてよいであろう。何故ならば、開祖がそこから降誕されたと言われる特別意味深い天の名に、外教の天名を借用してそれに充てたとは如何にも考え難い事であるからである。

では、*釈尊*は何故に *Tusita* より来られたと言われる様になつたのであろうか。*釈尊*の出家の動機も——後の仏伝が説く如く衆生の救済にあつたのではなく——自己自身の解脱にあつたと考えてよい。*釈尊*は解脱を求めて出家され、辛苦の後、終にその究極の境地に至られた。それは換言すれば、自己の解脱を求めて精進し、行き着いた所が「解脱者の境地 (*tusita*)」であつたと言えよう。即ち、*tusita* は「自己の解脱に満足する」という心境であつたと考えられる。しかしながら、*釈尊*はこの自己の解脱の満足にとどまり、沈黙・寂滅してしまわれた訳ではなかつた。*釈尊*はそこから衆生の教化へと歩み出されたのであつた。従つて、その意味で、*釈尊*は *tusita*——自己の解脱を以て満足とする境地——より踏み出された方だと言えよう。それは、衆生の側から見れば、まさに「*釈尊*は *tusita* より来られた方である」とは言えないであらうか。

かくして、本来は解脱者の心境を表わしていた *tusita* (pp. 8 *tusati*, *√tus*) が、解脱者*釈尊*の神格化を通して天界に持ち上げられ、固有名詞としての用法が生じるとともに、心境的問題が空問的に解されるに至つたものと考えられるのである。